



号月一十 六之五

号二十七百第

号輯特會動運



26
28
33

學校日誌より

十月三十一日 全校生徒扇浦小學校運動會見學に赴く
 十一月三日 明治節式舉行 大神山神社參拜
 十一月二十日 運動會開催 健康週間開始

得点 赤軍 八五点
 白軍 七七点

マラソン 高一堤玉成美君優勝

金品寄贈者芳名

一、金五円也 保護者會へ 内山登美子 裕殿

尚運動會には多数金品の御寄贈がありました。
 右紙上を以て厚く御禮申し上げます。



運動會 健康週間 水野市五郎

水野市五郎

運動會 真心を分けて學びし子らはみな
 今日は何やらに脱ぎそふらん

同 子らは皆いそぎで雌雄決すらん
 よく公明にしかも正大に

健康週間 命より迎えたきたら進みはらへ
 おれは來週ならは行かぬと

寄ってくる字宙の細菌は命より 防く手段が健康週間

誠心ほうぶすの神まきこしめし 今日のみき日を日和にほして
 世の中の 苦らく 輪拔の如くなり

かいてくし見を重なりし ちよつてよし アノ兵隊の土居ふるまひ
 大運動も 綿の小玉に倒されぬ 象に隣には甲をめぐ

お掃除は 早いばかりか能でない 嫁入前の見合試験で

優勝旗出場 交々の 喜慶愛抱えて納めけり

大空をひろつたるを放り出し
 七、世の中の学者 巨引く巨引。 首角力負けた方から 則ち出る

八、まじつま 鳴りつまは各角つま合ひが道のつま
 九、喰ひ逃げ 喰ひ逃げが標父入をもちふ世なりけり

- 同
- 一、運動會の天気
- 二、輪拔競走
- 三、兵隊の兵隊
- 四、彈丸倒し
- 五、朝のお掃除
- 六、空をひろへ
- 七、世の中の学者
- 八、まじつま
- 九、喰ひ逃げ

と なつて、ぼくは かけたした。いつしやうけんめいにかけたしやうせんにはいつた時は二とうでした。そのつぎのかけこには三とうを とった。ぼくはうれしく たまりませんでした。家へかへつておとうさんやおかあさんにみせる とよかつたね。とほめて下さいました。よくみると二とうがたおるで三とうはまいあさかほをあらふ時わらつたたおるでかほをふまます。たおるをつかたばらう。んどうくわいを思ひだします。

私のたのしんで、あたうんどうくわいもすまました。その日はうら

れしくて朝はやくおきました。ところか雨がざあ／＼ふつておきました。私にはびっくりしました。そのうわに雨がやんで来たのでうれしくて、ごはんをたべて学校へいきました。そしていつものとほりはじまりました。はじめに君が代をうたひました。つぎはうんどうくわいのうたをうたひ、そのつぎはラヂオたいさうをうたひ、うんどうをはじめました。二年生のセエロきやうそうでうたをとりました。ときやうそうでは三とうをとりました。おひるからおかあさんとおや子リレーをして、私たちがかちました。そして、たくさんほうびをいただきました。をほりし

三とうのつづりか



■ ときやうさう 羽鳥崇夫

第一番に私たちのときやうさうです。胸がどき／＼して来ました。出線にならびました。僕は一番はじめて、さつと一番びりになるか、知れない、と思ひました。やがて、「用意、どん」となりました。僕は一生けんめいになつてかけました。最初から二等をついておきました。父ちゃんが「ほり、崇夫、負けるな」と言つたのも知らずにかけました。二とうめにはもうぬかれるかと思ひましたがぬかれずに決勝線まで行きました。ほうびをもらつて、おはあちやんの所へ持つて行きます。二等だつたかい」と言つてほめて下さ

■ ときやうさう 永田綾威雄

ひやくと朝風にゆられながら空にひるがへつておる日の丸の旗。今日の運動會の最初は僕たちのときやうさうだ。僕は胸がどき／＼して来て足がふる／＼ふるへた。僕は四番目の列だ。いよく僕たちの番になつた。僕たちは六人は出線線に並び、先の方をじつと見つめて、「どん」と思ひすとるがなつたら飛び出さうとみかまへた。「用意」と先生の聲、續いて「どん」とびすとの音。僕は聞くが早いのか、かけ出したが後から来たニシ人にぬかれた。負けるものかとむちやうになつておけたが、間は次第にはなれりばかり。二周目になつた。今度はすん／＼と進みついて、第一番。目の前に決勝線が見えた。砂けむりを上げて決勝線とびこんだ。それをうたは進みつけなかつた。僕はとう／＼四等だつた。砂場の所まで来ると横腹が痛くなつた。僕は進みつけなかつたのが、ごん／＼でたまらな

あつた。

■ 首引

淡路 賢子

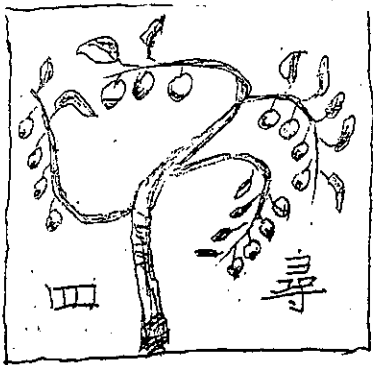
三四年の男生が並んで出て来ると、となりたお
た大人の人が「此の子だちのするのとはとて
おもしろいです」と言つておました。ん
中に線の所へ行くと、先生が「用意、どん
とびす」とるをやらしました。みんな一度に
ひつぱり始めました。ひつぱる、ひつぱる。
中にはすわつたさりでおしたりころんだり
してゐるのがおました。又、顔をまつかたし
て「生けんめいにひいておるのも居ました。
見物人は「わあ、笑、笑、笑、見えます。時
間はだん／＼とまつて来ます。とう／＼、どん
／＼とやめのびす」とるが鳴りました。中の
生徒はみんなやしやがみました。勝つた人は前
に並びました。かぞへて見ると赤が勝ちまし
た。先生が「赤はんがいとをよと、赤は大
きな聲で「ばんざい」といひました。
「あ、おもしろかつた」とうしろの方で誰
かが言ひました。

■ おちごさん

小宮山 トシ

お祭の時おちごさんが出た。私が見に行くと皆
おちごさんの家へかけようとして来た。おしろ
いをまつ白たつけてほんとうにかわい／＼顔をし
てゐた。おけし／＼かすむと赤い着物を着てむ
らさきのはかまをはいてうすい白いきれいな着
物を上に着た。皆おをわい／＼とておきれいだつ
た。皆かむむりを着けてかはいかつた。私もな
かまにはいりたくなつた。おみこしが出る時皆
はそいつなにつかまつて、とかきの本を持つてを
ち／＼並んで通つた。男の小さい子もやはりお
しろいをつけて、せつと前にす／＼をつけて「ちや
ん／＼」とやらしながら行つた。私はよく見え
がらおとをついて行つて見た。
家にかへつて、しばらく遊んでおると、おちごさん
がおちごのはいつた箱を下げてかへつて来た。
私はおちごになつておちご私もおちごさんのや
うにならんかねと思つて、おちごさんになつた
てたまになかつた。

をばり)



上手な

綴方

両校リレー

平野昌代

買けて居ました。途中で道のつぎぎした。
淡路真のそばで扇神の生徒がたぶれ、大村が優
勝し目出度く並んで席へ着きました。

親子リレー

村上 亨

大村と扇神の選手リレーです、男生の方はす
みました。「用意」 私たちは大村が勝ち
ます。と祈りました。「ドン」

先生の合図、「買けるな」 両校の生徒
がほえるやうな聲でおうえんをする。選手達
の胸にはどちりも大村になど買けるものか、
扇神などを買けるものか、といふ心できつと
走つたことと思ひました。二年生は
一週した、大村が勝つてゐます。二人目三人
目、いよいよ最後です。大村はくやし

だん体たのニリレーがすんでいよいよ僕たち
の親子リレーになりました。二組に令れて第一
組は子供の力が早かつた、僕等の番になつた時
胸がどき／＼たり出した。パトンを受けるとい
生けん命走つた。二週走るわけである、僕の前
はお父さんが一生けん命に走つてゐる
一週目にはどうしても追ひこせなかつたが二週
目にやう／＼追ひつたと思つたらお父さんが
ころんだ。僕はお父さんがころんでゐるさまに
おひこして次の子供にわたした。そして二組も
子供が優勝した。校長先生に洗面器とせんたく
板をもらつた時は僕の胸はうれし

あつた。

運動會の朝 高内利子

徒競走

鈴木幹哉

十一月二十日はうれしー 運動會でした
私はゆふべから嬉しくて ー たまりません
でした。夜が明けると飛び起きて外へ出て空
を見ました。少し曇つてゐました。草葉を
見るとゆふべ降つたらしくぬれてゐました。
空が曇つてゐるし今日は運動會はないだらう
と思つてゐると、せう平のおぢさんが
「今日しなくてはあした船が入るから運動會を
するよ」とおつしやいましてたのびつと安心
しました。お母さんが「御飯ですよ」と
おつしやつたので家へははり、御飯を食べて
夕スキを持つて亨さんと二人で學校へ行しま
した。

僕は一番先に徒競走である。すぐ集つて六人
づつ組を作つた。僕は三番目の組である。
一番二番とやつて三番目の組になつた。
スタートに並びました。其の時胸がどき
してゐました。
「いー」と先生の言葉。 「ドン」とピストル
の音。僕は一目さんに走り出した。後の人に
ぬかれたいやうに全速力をだしました。
一週した時におうえんの聲がとておうるさい程
でした。間もなく決勝戦でした。
僕はとうとう「テープをきつた。そしてほうび
はタオルと半紙をもらひました。赤のきしやう
を胸につけてもらつて僕はうれしくてー
だまらなかつた。

さ は り

五年生

地の姓 石田多美



いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき
いづちの森にへうたん池に遊びに行くとき

運動會 横山香雄

雨が降る。雨の音が静かな闇を破つて聞
へた。目をささしてみると遠くに雨が降つて
ゐる。「あ、明日の運動會は出来ないうか、
つらいな」とつぶやきながら寝た。

障物 浅沼寅男

障物で身が重く しりあがりかまきり
人手をかりて 綱をとか

鶏の聲にどが起きて見ると西がまだぼんぼん
と降つてゐた。もう運動會は出来ないうか
めで又どこに入つた。間もなく学校の庭で人の
こゝろが「かやー」と聞へる。行つて見ると庭の
水たまりを埋めやうと言つてゐる。
敷居からバケツを持つて来て砂をばこんだ。
だんく。水たまりはなくなつて遂に一つもな
くなつた。上野先生が今日は運動會が出来な
らうといつたのでうれしくてだまらなかつた。

る。バナ、はみん存折出してしまふ木の葉や枝
 がどんで来てガラス戸にぶつかかり、雨戸はめり
 めりと鳴つて今にもたほれさうである。幸に
 學校は休みだつたので私は家の中にちびこ
 まつて居た。風の合間を見て、そつと雨戸をあ
 けて外をのぞくと、木の葉がばあつと家の中へ
 まは込んで来た。山の方を見ると水が満ちな
 づて流れ落ちて居る。強い風が吹き上げると
 白い水煙がばあつと上つて物すごい。しかし
 たこの木だけは四方八方に足をふんばつて平
 氣な顔をして居た。

● 兄の事 佐山和子

私の好きな兄さんは今南米に居ます。私が
 五つか六つ頃、一緒に東京に居た時、居た時
 事です。或日兄は父の云ふことを聞かぬか
 たと見えて、私が夕方家にかへつて来ると何か
 叱られて居ました。私が夕飯を終へて床に入

らうとするとお前なんか出て行けよといふはげ
 しい父の声、おは、さうだと幼な心にも思ひ
 ながらねむらうとすると、どうしても眠れませぬ
 思ひ切つて起きて行つて、「お父さん、私があや
 まるからかんにしてさようだ、いと云ふと、父は
 むつかしい顔をゆるめてやうやく許してくれま
 した。後で兄は「有がたうよ」と云ひました。
 又或時、兄と一緒に學校に遊びに行きました。
 兄は校内に入ったまゝ、いつ迄たつてもかへつて
 来ない。その内日が暮れか、つて来ました。私
 はまだ一度も来たことのない所なので一人ぼつ
 ちで泣いて居ると、近所の人がつれてかへつてく
 りました。あとで兄は「つきはごめんよ」とい
 ました。考へれば思ひ出はあとかういふと浮
 れど来ます。もう一度會ひ度いと思ひますけ
 れど遠くて會へません。



高一作文

落葉

奥山憲一

がさりとくと葉が一枚々々落ちてくる。
 もう冬も近くなつた。今朝も當番で校庭
 に来て見たら葉が一面に落ちて居た。
 今見れば防風林にも澤山落ちて居る。
 の木を見ては葉がなかつたり枯れたり
 して居る。此の間の風で枯れたらもあるだらう。
 向ふのハイヤの葉は元気がない。此の葉も
 枯れて落ちてしまふだらうか。
 又は何とぞしとばかりに元氣を出して元の
 種を立派な葉に育てるのか。
 それと同じ様に人も事業に失敗した時に
 何とぞしとばかりに前よりも元氣を出して
 やれば必ず成功するものである。

金原慶子

御事紙有難うございました。
 こちらも大人しく寒くなつてきました。
 そちらはどんなにか寒い事かと思ひます。
 十一月十日には運動會が盛大に行は
 れました。とてもにぎやかでした。
 私も三等になりました。マラソンの優
 勝旗は今でも私達の級がとりました
 から喜んで下さい。
 あなたも島が事を思ひだされつせう。
 お正月も近づくて来ますね。
 あなたは正月を東京で迎へるかは始
 めてますね。お友達が居ると淋しい
 せう。来年の八月には丸ごと大つて
 お出でになるのを楽しみに待つて居ます。
 だけかせを引かちやうに御体を大切に
 十二月十七日
 大道さんへ様
 遠く島より

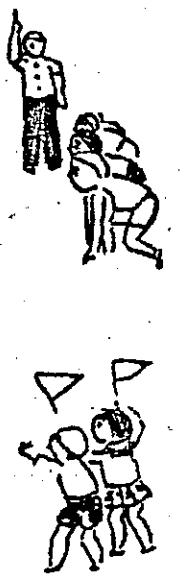
くもと蝶 沖山茂子
 夜の冷たい空気がしよに一匹の蝶が入り
 きて勉強してゐる私の頭の上を軽く飛ん
 で行った。蝶が入つて来た」と舌打した
 がら鉛筆を走らせた。
 何の氣持しに頭に手をかけると何か手に
 ふれたものかあつたか、あわててはらひかけ
 ると机の上に落ちて来た。見ると一匹か
 りしがさつさつと蝶を腹の下におさへて
 毒をさしてゐる様子だつた。
 私は「あ、やだどうして夜もか頭へ入ん
 かつたんだ、さう朝もなうい、けいどい
 思ひながら見てゐると蝶はひげを動
 かしたり翅をふるはしたりして苦しげうに
 もめいてゐる。

上京の弟を想ひて 石津岩子
 兄弟中一番仲のよかつた嵩夫と別れたの
 は丁度 木々の芽の青い五月であつた。
 早 七月になる。日數がたてば自然
 別れたさびしさも忘れだらうと思ひの外
 幾月経ても忘れぬことが出来ず。残し
 ていた答書を見たり。置いていた遊具
 等を見ては只々 弟の事事が次々と
 思ひ起される。 男ではあつたが私立
 はやさしかたので家中は皆 可愛がつて
 おた。 船便毎に色々と身の廻りの
 物を送つてやる。 今度 初めての冬を
 迎へて どんなに寒たいであらう。きつと
 いきを ふうふう させながら登校してゐる
 だらうと思ふ。 此の暖かな島で通學す
 する方が どれだけよいだらうと思ふことが
 たびある。 此の前も母に話したのであるが
 やはり將來をめぐして上京してゐる弟を
 よび戻すにはしのびない。

運動會 高二

菊池昭郎

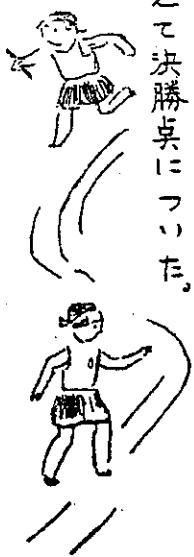
ドン！とピストルの音と共に攻めてい
 たがなかく棒が倒れない。跳上つて棒の中
 かりついたがすぐに引下された。みるく
 に自分の方の白は旗をとられて一回目の攻城
 は負けてしまった。二回目はどうしても勝た
 なければならぬと思つて力の限り奮戦した
 かとうく敗られてしまつた。プロگرامも
 段々と数少なくなつて終にマラソンとなつた。
 私等高等二年が優勝旗をとればい、と思つて
 みたが高等一年の児玉成美君にとられた。最
 後の縄引は渾身の力をひきしほつて引張つた。
 終りに大平洋の...と云ふ行進曲を歌ひなが
 ら校庭を廻つた。その頃は日はもうとつぷり
 と暮れてゐた。これが最後の運動會だと思ふ



原田正道

と急に淋しいやうな氣持がした。
 出發兵へ八人の建児が一行にならんだ。赤や
 白の帽子をかぶつてどれもこれも勝つてやらう
 と云ふ顔つきをしてゐる。プロگرامには障
 物競走の五文字が筆大く書かれてある。運動場
 を取巻いた見物人は一時に静まりかへつて顔と
 小顔目と云ふ目は一時に建児の方にそ、かれ
 た。用意！と云ふ先生の聲がおおそかにひ
 く。皆は我先に出でんとかまへた。ドン！と
 云ふ音と共に僕は矢の如く突進した。彼をく
 る様子を見る助木を飛越えろ。網を飛越えろ。
 僕は此の網はなん越えた。下手な人は網の目
 足を引っかきこめてしまふしてゐる。最後は網をく
 づつて柵木を飛越える。これも僕はなんなく越

えて決勝点についた。



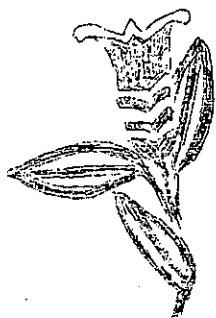
▲・● 安川富貴

今日は私達の待ちに待ったのしい運動會だ。「ドン」とピストルが鳴ると同時に皆走り出した。赤勝つように白勝つようにと云ふ子供等の聲におくられ皆一生懸命に走る。空には運動會の旗が朝風にひらひらと翻つてゐる。今日の運動會を祝ふが如くに、さつまで響つてゐた空も晴れてちやぶれ雲が皆々に消えてゐる。私達の朝のお掃除ももうすぐ、先生のおつまれの号令が聞える。いよ／＼私達の番だ。「やだ、胸がどきどきする」といふ聲があちらからこちらから聞える。私も胸の高鳴るのと同じくすることも出来ない。スタートの上には立つた「一秒ニ秒」ピストルが鳴った。皆一せいに駆け出した。私もたゞ夢中だ

つた。見物人の應援の言葉もうつろに聞えるやつと仕度を終へて決勝までかけてくると誰か「手拭と云ふ層にはつとした。手拭は手にもたれたまゝだ。私は恥かしくとくやして胸がばいになつた。あとで家にかへり皆にあわてんけうだ」といふ口を口れた。

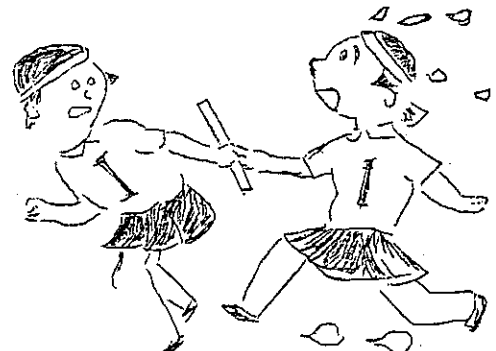


運動會徒競走成績



尋一、二男
 笹本 仁 一三秒
 大沼清次郎 全
 奥山涼子 一四〇
 金川愛子 全
 鶴澤ケイ子 一三・五分四
 尋三四男
 浅沼 隆 二九・五分二
 村上 亨 三〇・五分二
 川崎オケイ 女 三〇・五分三
 石井光子 三〇・五分四

尋五、六男
 袴池 徳次 二七・五分四
 和田 清 二八・五分三
 石津弘子 女 二九〇
 笹本良子 二九・五分三
 高一一、二男
 原田正道 四一・十分九
 石井良郎 四三
 高崎 輝子 女(青女) 二八・五分二
 西村 静江 二八・五分四
 毎田 美津 全



おことはり。
 以上の記事並びに繪は運動會所載のものを因録しました。



なでし之第七十二號昭和十年十月号

大村尋常小學校なでし編輯部